【平成23年度　東海地域農政懇談会　資料】

出典：東海農政局ホームページより

～長良川と揖斐川に挟まれた輪中地帯「長良川用水」～

国営かんがい排水事業　長良川用水地区

平成23年12月

東海農政局

目　次

１．高須輪中の水利開発の歴史　・・・１
２．過去の国営事業の状況　・・・２
３．国営長良川用水地区の事業概要　・・・３
４．事業の効果
（１）小麦・大豆生産の大幅な増加　・・・４
（２）農地集積の進展と労働時間の短縮　・・・５
（３）農業経営の安定化　・・・６
（４）国営事業を契機とした地域の展望　・・・７
５．地域の活動状況　・・・９
６．地区が抱える課題と対応　・・・10

1．高須輪中（たかすわじゅう）の水利開発の歴史（水との戦い）

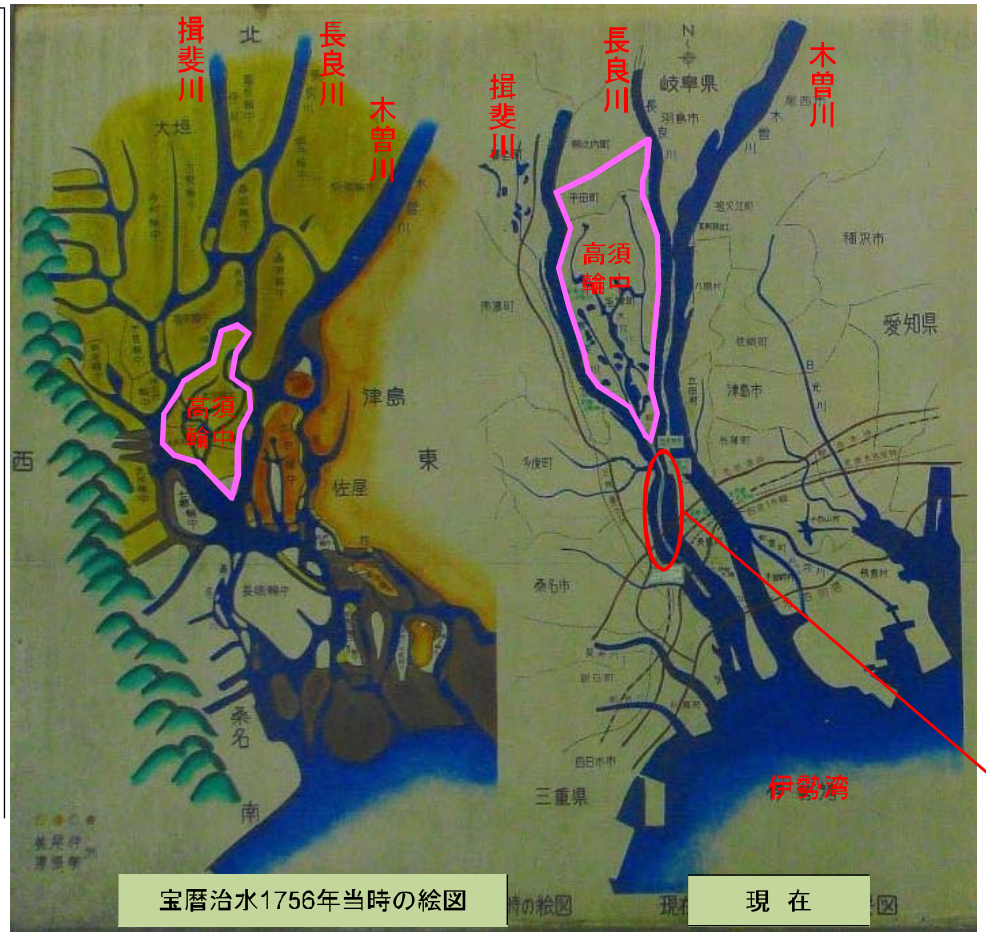
○ 長良川用水地区は、「高須輪中」と呼ばれており、木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）の下流域にあり、古くから洪水と戦い、耕地を広げてきた。

①江戸時代前期(1600年頃)になると、徳川幕府が尾張藩の領地を洪水から守るため、御囲堤（おかこいづつみ）の工事を行った。それ以降、西側の高須輪中を含む美濃藩は、多くの洪水被害を被ることになった。

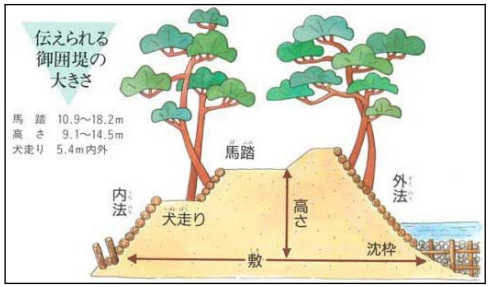
②江戸時代後期(1750年頃)には、木曽川・揖斐川の分流を目的に徳川幕府が薩摩藩に命じ、宝暦治水工事を実施した。

③明治時代(1900年頃)には、オランダ人技術者ヨハネス・デ・レーケに調査を依頼し、25年の歳月をかけ木曽三川 の本格的な工事を実施し、木曽三川の下流部はほぼ現在の形となり、洪水被害の軽減が図られた。

江戸時代の御囲堤と高須輪中



宝暦治水前と現在の木曽山川の比較



御囲堤断面：出典：木曽川上流事務所

宝暦治水工事を再現した銅像（治水神社）

宝暦治水工事で造られた堤防（千本松原）

内務省技術顧問
ヨハネス・デ・レーケ

2． 過去の国営事業の状況

○ 明治～大正時代には、水害の危険が少なくなったものの、輪中地域独特の堀田での農業生産を行っていたが、内水を排除し農業の生産性を上げる意欲が高まり、樋門、排水路、排水機場の整備が行われた。
○ 具体的には、昭和20年代～40年代にかけて、国営長良川農業水利事業（用水改良主体）、国営高須輪中農業水利事業（排水改良主体）等によって、用水機場の新設、排水機場の更新・増設、区画整理等、多くの土地改良事業が実施 され、現在の高須輪中地域の農業基盤の基礎が整備された。

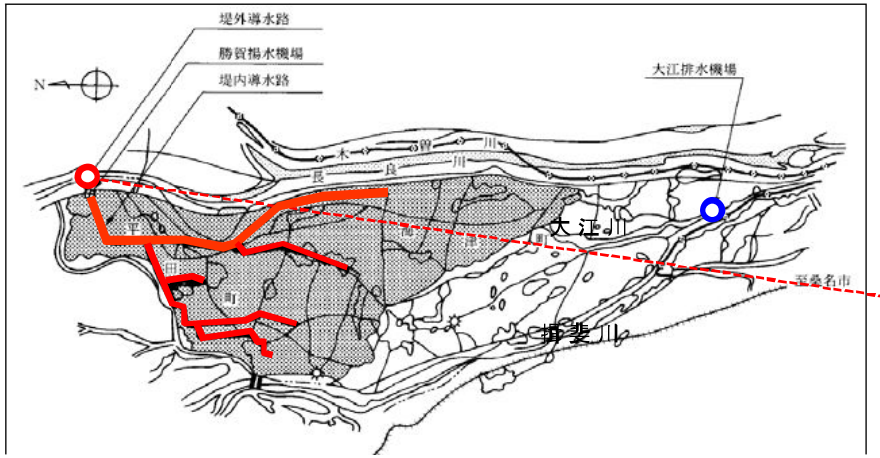
■国営事業前の営農状況

輪中地域独特の堀田(撮影_河合孝氏)

船に乗り堀田を移動していた(撮影_河合孝氏)

（※堀田とは、輪中内の低平地で稲を作るため、周りの土を掘り上げて、盛った水田である。）

■国営長良川農業水利事業（昭和22年度～昭和26年度）

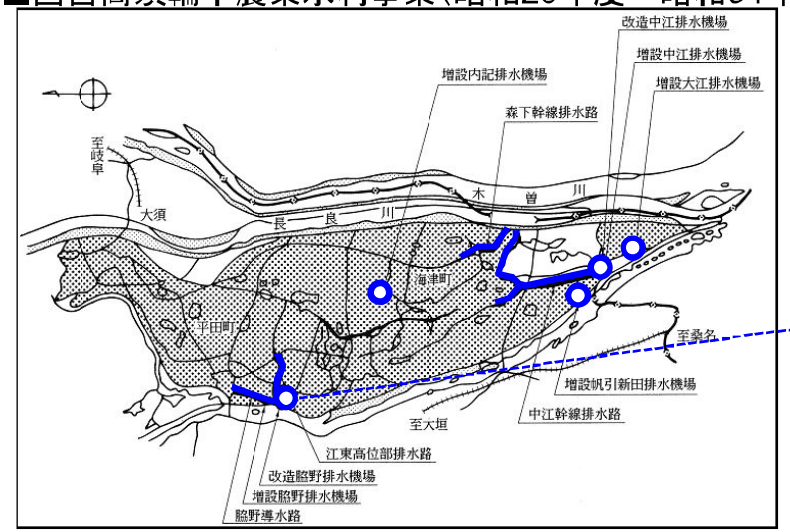


国営長良川農業水利事業の概要図

【主要工事】
勝賀揚水機場　1式
大江排水機場　1式
用水路　1.3km

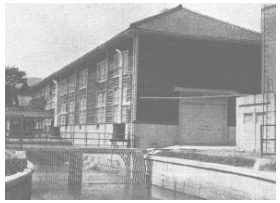
勝賀揚水機場

■国営高須輪中農業水利事業（昭和28年度～昭和34年度）



国営高須輪中農業水利事業の概要図

【主要工事】
排水機場　5ヶ所
（脇野、中江、帆新田、内記、大江）
排水路　5.1km



脇野排水機場